

シリーズ 人権・じんけん (87)

教科書無償

しうんまる ～紫雲丸事件の陰で～



新しい教科書をもらって、今年も一生懸命勉強します(あすなる児童館の子どもたち)

4月になると、入学・進級した小・中学生の子どもたちは、それぞれ学校から、その年1年間に勉強する教科書の新しい教科書をもらって帰ってきます。

義務教育では、教科書が無償で子どもたちに渡されているのは普通のこととされていていますが、かつては教科書は購入するものでした。

教科書無償化は1964(昭和39)年から段階的に実施されましたが、無償化運動のきっかけとなったひとつの事件を紹介します。

四国と本州は、今は瀬戸大橋で結ばれていますが、以前は国鉄の宇高連絡船が交通の大動脈でした。

1955(昭和30年)5月11日、高松を出港した紫雲丸が、濃霧のため高松市女木島付近で、第3宇高丸と衝突しました。わずか4分という瞬時に沈没し、168人の乗客が亡くなるという大きな惨事になりました。

沈没した紫雲丸には、京都や奈良方面へ向かう高知県の中学生117人の修学旅行生が乗船していました。そのうち28人の生徒が犠牲になり、その中に、16人



紫雲丸事故で犠牲になった28人の生徒を慰霊する「紫雲丸遭難記念碑」

の同和地区の子どもがいました。

この痛ましい事件は、手をあげ必死に救いを求める多くの子どもたちの生々しい写真とともに、人々に大きな衝撃を与えました。

なぜ同和地区の子どもたちに多くの犠牲者が生じたのでしょうか。この背景には現在では想像もつかないほど貧しかった時代の状況が秘められていたと、今でも関係者の中で語り継がれています。

保護者はわが子のために、借金しての修学旅行参加であったともいわれ、またカバンなども、親戚や知人からの

借り物も多かったとのこと、「絶対なくしたらいかんぜよ」と言われての旅でした。このような状況での衝突事故の中、「甲板から船室へカバンなどを取りに戻ったため犠牲が多かったのではないか」と助かった人は語っておられません。

義務教育最後の友達との思い出として、修学旅行へ参加させた保護者の願いや思い、さらに借りた物を返さなければならぬと思った子どもたちの心情を考えると、この事件はいろいろなことを示唆しています。

この事件をきっかけに、差別と貧困からの解放を願い、子どもたちに満足な教育を受けさせてやりたいという保護者の気持ちがよいよ高まって行きました。

こうした地元の状況の高まりの中から、1961(昭和36)年、高知県から教科書無償化の運動が起りました。運動の輪は全国へ広がり、1964(昭和39)年から段階的に教科書の無償化が実施されました。

児童・生徒の手に、教科書が無償で渡されるようになった運動の原点を、もう一度確認していただきたいと思えます。

(『教科書無償』教科書無償編集

委員会編 解放出版社 参照)